

# 保育者の資質に対する女子学生の意識

## —幼稚園教諭資質と保育士資質の比較—

吉 村 英

(教育学科教授)

片 岡 基 明

(初等教育学科助教授)

吉 村 啓 子

(京都光華女子大学短期  
大学部教授)

現在、我国における就学前教育の在り方が大きく変化しようとしている。幼稚園と保育所の機能を整理・一体化させようという「幼保一元化」からスタートした議論は、「総合施設」に関する議論を経て「総合施設モデル事業」、「認定子ども園」へと発展しつつある（社団法人全国保育士養成協議会専門委員会，2006）。このような時代の流れの中で、幼稚園教諭に求められる資質や保育士に求められる資質についても再検討が必要な時期に来ているといえよう。

幼稚園教諭や保育士のように専門的に保育を学び、公的な資格を持って直接保育現場で保育にあたる人を保育者というが、保育者の資質や専門性については、さまざまな観点から検討が行われている（鯨岡，2000；松平，2000；秋田，2000；森上，2000）。しかしながら保育者の「望まれる専門職像」については、現時点での明確な回答はなく、時代の要請を視野に入れながら継続して検討していくべき課題であると思われる。

「幼保一元化」は時代の流れであるともいえるが、現在のような大きな動きとなった背景には、少子化、就労形態の変化、待機児童の増加などの要因が指摘されており、これらの社会変化が、結果的に幼稚園と保育所の境界を低くしているといえよう（森上，2004）。しかしながら保育者の専門性について考えるためには、まず幼稚園と保育所の違いについて確認しておく必要がある。両者は管轄している省庁、従うべき法令が異なっている。具体的には保育の目的、保育者に必要とされる資格・免許、保育内容の基準、対象年齢、保育時間、給食などに違いが

みられる。すなわち幼稚園は、文部科学省が管轄し、学校教育法に基づき、「幼児を保育し、適当な環境を与えてその心身の発達を助長すること」を目的として、幼稚園教諭免許状を保持している教諭が、幼稚園教育要領に示された教育内容を、主として3歳から5歳の幼児に教育する場である。これに対して保育所は、厚生労働省が管轄し、児童福祉法に基づき、「日々保護者の委託を受けて、保育に欠けるその乳児又は幼児を保育すること」を目的として、保育士資格証明書を保持する保育士が、主として0歳から5歳の乳幼児を対象として、保育所保育指針に示された内容の保育を行う場である。また保育所では保育時間が8時間以上であることが多く、給食は義務であるが、幼稚園では保育時間は原則的に昼までの4時間であり、給食は任意である。このような違いからかつては、幼稚園は「教育」が主となる場であり、保育所は「養護」が主となる場であると捉えられることが多かった。したがってそれぞれの場で必要とされる資質や専門性についてもおのずから異なるという認識が一般的であった。しかしながら教育内容の基準となる幼稚園教育要領にも、最近では「養護」に関する内容が入り、保育所側の考え方に近づいている。また保育内容の基準となる保育所保育指針も「教育」に関する内容が強化され、幼稚園側の考え方に近づいているといえよう。このように時代とともに、理念的には両者の差は小さくなってきているが、実際には現場ではどのように受け取られているのだろうか。

山崎・樟本・上田他（2004）は、保育現場で

働く幼稚園教諭と保育士、および保育者養成課程を担当する教員を対象として調査を行い、幼稚園教諭と保育士の間に、幼保一元化に対する認識や保育に対する信念に違いがみられたことを報告している。また保育者養成課程担当教員の中にも、幼稚園教諭と保育士の資質に違いがあると考える人は少なくないことを報告している。

三木(1996)は、保育者養成課程で学んでいる学生を対象とした調査を行い、学生たちは幼稚園教諭と保育士には異なった資質が必要であると捉えている可能性があることを明らかにしている。さらに吉村・添田・吉村(2005)も、保育者養成課程の学生を対象とした調査結果から、学生たちが幼稚園を3歳児以上の子どもの「教育の場」と捉え、保育所を0～6歳までの子どもの「養護の場」として捉えることにより、必要とされる資質には異なる部分もあると考えている可能性を指摘している。

保育者の資質や専門性について考えることは、保育者のアイデンティティとは何かを問うことでもある。保育者養成課程で学ぶ学生たちは、講義や実習を通して保育者としての専門性を学んでいく。この期間は保育者としてのアイデンティティの基礎を形成する重要な時期であるといえよう。たしかに時代の流れとともに、社会的な要請を受け、望まれる保育者像も変化せざるを得ない部分もある。だからこそ保育者養成課程を持つ大学にとっても、時代の要請を視野に入れながら継続して検討していくべき重要な課題であるといえよう。

そこで本研究では、保育者養成課程を持つ大学に入学した直後の新生を対象として、幼稚園教諭資質と保育士資質についての認識を明らかにするための調査を行った。保育者養成課程に入学してきた学生達がどのような保育者像を持っており、それが講義や実習を経験することでどのように変化してゆくかを実証的に明らかにすることは、保育者養成課程教育のあり方を検討する上で貴重な資料となりうると考えられるからである。

また本研究では、大学に入学する以前の保育参加体験の影響についても検討を行った。保育

者養成課程に進学する学生の中には、比較的早期の段階から進路選択を行っているものが多い。したがって大学入学前から既に、自分なりの保育者像を抱いている可能性が高い。早期に進路決定を行っている原因の一つに、中学時代や高校時代の職場体験学習が考えられる。この取り組みは、事業所などの職場で短期間働くことを通して、職業や仕事の実際について体験したり、働く人々と接したりすることにより、中学生や高校生に啓発的経験を与えようというものである(文部省, 1993)。1980年代後半から始まったこの取り組みは、フリーターやニートの増加という社会的背景のもと、各地で積極的に取り組まれるようになり、2004年度には全国公立中学校の9割近くの学校で実施されるようになった。実際、保育者養成校においても、受験時の面接や自己推薦文の中で、志望理由として幼稚園や保育所での体験学習を挙げる者が多くなってきている。このような体験が、保育者つまり幼稚園教諭や保育士としてのイメージや、資質および専門性に関する意識に大きな影響を与えていることは十分考えられる。そこで本研究では、中学時代や高校時代における職場体験の有無についても調査を行い、その影響について検討を行った。

## 方法

調査対象：K女子大学短期大学部初等教育学科1回生142名。平均年齢は18.2歳(標準偏差0.74歳)であった。

調査時期：平成18年4月

手続き：大学での講義時間内に質問紙を配布し、回答を記入させた後、直ちに回収した。所要時間は約10分であった。

質問紙の構成：質問紙はフェイス項目、保育への参加体験、進学決定時期、保育者志望の強さ、資格取得希望、幼稚園教諭や保育士適性の自己判断、幼稚園教諭や保育士の資質に関する認知、および自己の資質に関する認知を問う項目群によって構成されている。

保育者志望の強さに関しては、「絶対になりたい」(4点)から「なりたくない」(1点)までの4点尺度で回答を求めた。資格取得希望に関しては、幼稚園教諭免許と保育士資格のそれぞれについて、「絶対にとりたい」(4点)から「とるつもりはない」(1点)までの4点尺度で回答を求めた。適性の自己判断については、自分が幼稚園の先生および保育所の先生に適しているかどうかを、それぞれ「たいへん適している」(5点)から「まったく適していない」(1点)までの5点尺度で回答を求めた。

幼稚園教諭の資質に関する認知については、吉村他(2005)の保育者資質を示す42項目を参考に項目の整理を行い、保育者資質25項目を作成した。この25項目が幼稚園教諭として仕事をするにあたりどの程度必要であるかを、「必要でない」(1点)から「必要である」(5点)までの5点尺度で回答を求めた。

保育士の資質に関する認知についても、同じ25項目を使用した。保育士として仕事をするに当たりこの25項目がどの程度必要であるかを、「必要でない」(1点)から「必要である」(5点)までの5点尺度で回答を求めた。

自己の資質に関する認知についても同様に、資質を問う25項目を使用した。25項目それぞれについて、自分がどの程度あてはまるかを、「あてはまらない」(1点)から「あてはまる」(5点)までの5点尺度で回答を求めた。

## 結果と考察

### 1. 保育への参加体験

大学に入学する以前に保育所や幼稚園などで保育への参加体験をしたことがあるかという質問に対し、142名中103名(72.5%)の学生があると答えている。大学に入学するまでに何らかの形で保育に参加した経験を持つ学生が7割を超えるということは、進路選択にあたって、中学校や高等学校における保育参加体験が大きな影響力を持っていることを示唆している。表1はその内訳を示したものである。中学校の段階

ですでに半数を超える学生が、体験学習やボランティア活動を通して、保育に参加する経験を得ている。最近では中学校の段階で、キャリア形成の一環として各種の職業を体験する試みが増えてきているが、保育者を目指す学生にとっては、このような体験が大きな意味を持っていることがうかがえる。

表1 保育への参加体験の有無

時期と形態	参加体験 (n=142)	
	あり	なし
中学校のときの体験学習やボランティア活動として	75 52.8%	67 47.2%
高校のときの選択授業として	17 12.0%	125 88.0%
高校のときの体験学習やボランティア活動として	48 33.8%	94 66.2%

### 2. 進学決定時期

表2は保育に関する大学や短期大学に進学を決めた時期についての結果である。高校入学前に保育系の大学への進学を決めていた学生は25.4%であった。つまり4人に1人の学生は中学校の段階ですでに進路を定めていたことになる。また高校1年で12.7%、高校2年では21.8%となっており、約60%の学生が高校2年までに進路を決定している。これらの結果から、保育系大学へ進学した学生の多くは、かなり早い段階から保育系への進学の意志を固めていたことがわかる。

表2 進学決定時期

時期	人数	パーセント
高校入学前	36	25.4%
高校1年	18	12.7%
高校2年	31	21.8%
高校3年	39	27.5%
高校卒業後	3	2.1%
わからない	7	4.9%
その他	8	5.6%
合計	142	100.0%

### 3. 保育者志望の強さと資格取得希望

保育者になりたい気持ちがどの程度強いかを尋ねた質問に対し、85%以上の学生が「絶対になりたい」、「できればなりたい」と答えている(表3参照)。また実際に保育者として働くためには資格や免許が必要であるが、資格や免許について具体的に尋ねたところ、幼稚園教諭免許については95%以上、保育士資格については80%以上の学生が「絶対にとりたい」、もしくは「できればとりたい」と答えている(表4参照)。入学直後には、多くの学生が保育者になりたいという強い希望を抱いており、幼稚園教諭免許や保育士資格の取得を目指していることがわかる。なお、保育者を志望せず幼稚園教諭免許や保育士資格取得を希望しない学生も数名いるが、これらの学生は小学校教諭を目指している可能性がある。今回の調査対象学科では小学校教諭2種免許の取得が可能であり、系列の大学に編入することにより1種免許の取得も可能である。今回の調査では保育者資質を中心的なテーマとしたため、小学校教諭については調査対象としなかったが、今後は質問項目に加えて検討していく必要があるだろう。

表3 保育者志望の強さ

	人数	パーセント
絶対になりたい	87	61.3%
できればなりたい	34	23.9%
どちらともいえない	15	10.6%
なりたくない	6	4.2%
合計	142	100.0%

表4 免許・資格取得希望

	幼稚園教諭		保育士	
	人数	パーセント	人数	パーセント
絶対にとりたい	105	73.9%	104	73.2%
できればとりたい	31	21.8%	12	8.5%
どちらともいえない	0	0.0%	1	0.7%
とるつもりはない	6	4.2%	25	17.6%
合計	142	100.0%	142	100.0%

### 4. 保育者適性の自己判断

入学直後の学生のほとんどは、保育者になりたいという強い希望を抱いていることが明らかになったが、それでは自分自身の適性についてはどのように考えているのであろうか。表5は幼稚園の先生、保育所の先生それぞれについて、自分がどの程度適しているかを答えてもらったものである。全体に幼稚園教諭の場合も保育士の場合も同じような分布を示している。一番多いのは「どちらともいえない」と答えた学生であり、約67%を占めている。「たいへん適している」、「かなり適している」と答えた学生は24%前後であり、「あまり適していない」、「まったく適していない」と答えた学生は約9%であった。つまり約3人に2人は「どちらともいえない」と考えており、約4人に1人は「適している」と考えているが、11人に1人は「適していない」と考えている。そしてその傾向は幼稚園教諭でも保育士でも変わらないということになる。保育者になりたいという強い希望を抱きつつも、具体的な勉強はこれからであり、自分の適性についてはまだそれほど自信がない、もしくは判断ができないという状況なのであろう。

表5 適性自己判断

	幼稚園教諭		保育士	
	人数	パーセント	人数	パーセント
たいへん適している	5	3.5%	5	3.5%
かなり適している	28	19.7%	29	20.4%
どちらともいえない	96	67.6%	95	66.9%
あまり適していない	12	8.5%	10	7.0%
まったく適していない	1	0.7%	3	2.1%
合計	142	100.0%	142	100.0%

### 5. 保育参加体験と進学決定時期

保育系の大学への進学を決めるにあたり、中学校や高等学校での保育参加体験がどのような影響を与えているかを検討するために、参加体験の有無と進学決定時期のクロス表分析を行った(表6参照)。 $\chi^2$ 検定の結果、人数の偏りに有意な傾向が見られた( $\chi^2(3)=7.19, p=.066$ )。残差分析の結果から、保育参加体験の無いグ

グループでは、高校3年時になってはじめて保育系大学へ進学を決めた学生が有意に多いことがわかる。これに対し保育参加体験のあるグループでは、高校入学前にすでに保育系大学への進

学を決めていた学生の割合が最も多い。中学校における体験学習やボランティア活動の経験が、進路選択に大きな影響を与えていることがうかがえる。

表6 保育参加体験と進学決定時期のクロス表

		進学決定時期					
		高校入学前	高校1年時	高校2年時	高校3年時	合計	
保育参加体験	無	人数	7	3	8	17	35
		%	20.0%	8.6%	22.9%	48.6%	100.0%
		残差	-1.39	-1.18	-0.35	2.57	
	有	人数	29	15	23	22	89
		%	32.6%	16.9%	25.8%	24.7%	100.0%
		残差	1.39	1.18	0.35	-2.57	
合計	人数	36	18	31	39	124	
	%	29.0%	14.5%	25.0%	31.5%	100.0%	

6. 保育参加体験と保育者志望、資格取得希望および適性判断

保育参加体験の有無が、保育者志望の強さや免許・資格の取得希望および自己の適性判断にどのような影響を与えているかを明らかにするためにt検定を行った。表7は保育参加経験の有る群と無い群の、各項目における平均値と標準偏差を示したものである。t検定の結果、保育者志望の強さ ( $t(56.49)=2.34, p=.023$ ), 保育士資格取得希望 ( $t(50.24)=3.36, p=.002$ ), および保育所の先生としての適性 ( $t(140)=3.79, p=.000$ ) において有意差がみられた。また幼稚園の先生としての適性には有意差の傾向がみられた ( $t(140)=1.92, p=.057$ ) が、幼稚園教諭

免許の取得希望については有意差は見られなかった。これらの結果は、中学校や高校で保育参加体験をしたことが、保育者になりたいという気持ちをより強めているということを示している。とくに保育士についてその傾向が強い。参加体験をした学生はしなかった学生に比べて、保育士資格を取りたいという気持ちがより強く、保育所の先生としての適性もより高いと考えている。幼稚園教諭免許については、参加体験の有無による有意差はなかったが、どちらのグループも取得希望は強い。したがって保育参加体験がない学生にとっては、保育士の資格よりも幼稚園教諭免許の取得の方が重要なのではないだろうか。

表7 保育参加体験の有無による平均値の差

	保育参加体験		有意確率
	あり (N=103)	なし (N=39)	
保育者志望の強さ	3.53 (0.76)	3.13 (0.98)	.023
幼稚園教諭免許	3.71 (0.62)	3.51 (0.85)	
保育士資格	3.60 (0.92)	2.77 (1.44)	.002
幼稚園の先生としての適性	3.23 (0.61)	3.00 (0.73)	.057
保育所の先生としての適性	3.29 (0.62)	2.82 (0.76)	.000

( )内は標準偏差

7. 進学決定時期と保育者志望、資格取得希望および適性判断

保育系の大学への進学を決めた時期の違いが、保育者志望の強さや免許・資格の取得希望および自己の適性判断にどのような影響を与えているかを明らかにするために1要因の分散分析を行った。図1は保育者志望の強さが、進学を決めた時期の違いでどのように異なるかを示したものである。分散分析の結果、進学決定時期の主効果が有意であった ( $F=4.48$ ,  $df=3/120$ ,  $p=.005$ )。そこで Duncan の法による下位検定を行ったところ、高校入学前と高校3年生時に間に有意差がみられた。この結果は高校入学前から保育系の大学に進学を決めていた学生の方が、高校3年生になって進学を決めた学生より、保育者になりたい気持ちが強いことを示している。では免許や資格を取りたいという気持ちに差は見られるであろうか。図2および図3は、各進学決定時期における幼稚園教諭免許や保育士資格の取得希望の強さを示したものである。分散分析の結果、いずれも主効果は有意ではな

かった。したがって資格取得に関しては進学決定時期の違いによる差はないということになる。

また図4および図5は、幼稚園や保育所の先生としての適性判断が、進学決定時期によりどのように異なるかを示したものである。分散分析の結果、幼稚園の先生としての適性 ( $F=2.66$ ,  $df=3/120$ ,  $p=.052$ ) についても保育所の先生としての適性 ( $F=2.55$ ,  $df=3/120$ ,  $p=.059$ ) についても有意差の傾向が見られた。そこで Duncan の法による下位検定を行ったところ、いずれの場合も高校入学前と高校3年生時に間に有意差がみられ、高校入学前から保育系の大学に進学を決めていた学生の方が、より適していると判断している傾向が見られた。これらの結果から、早くから保育系大学への進学を決めていた学生の方が、保育者になりたいという気持ちがより強く、先生としての適性も高いと判断する傾向があるものの、免許や資格に関しては、いずれの時期であろうと取得したいという気持ちに差は見られないということがわかる。

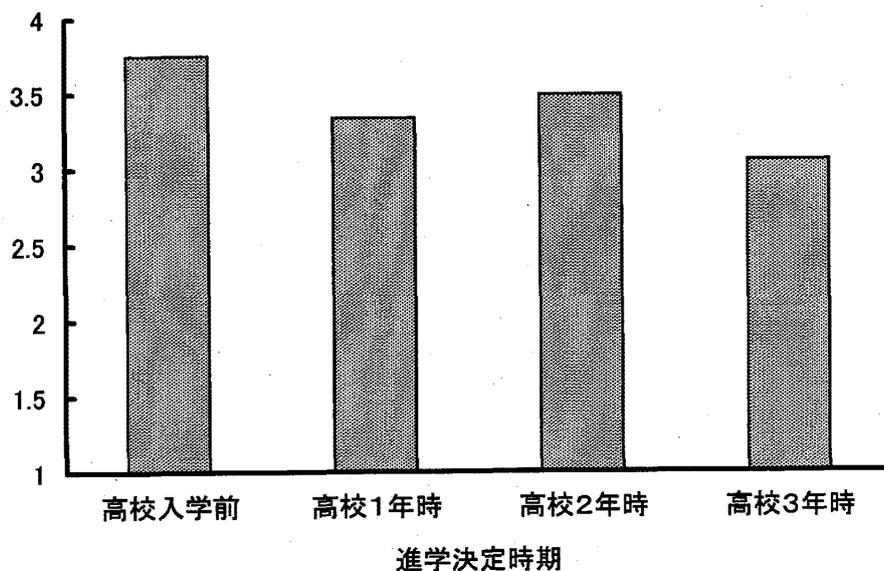


図1 保育者志望の強さ

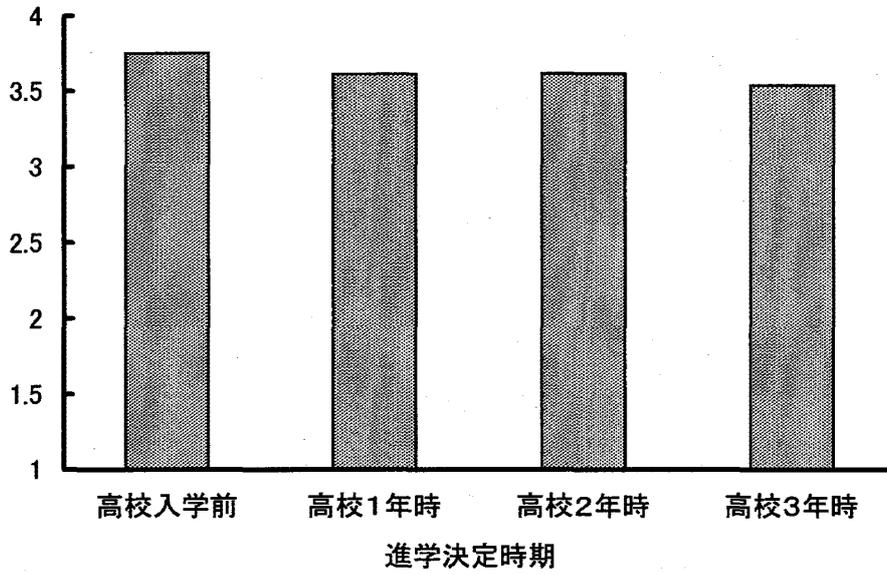


図2 幼稚園教諭免許取得希望

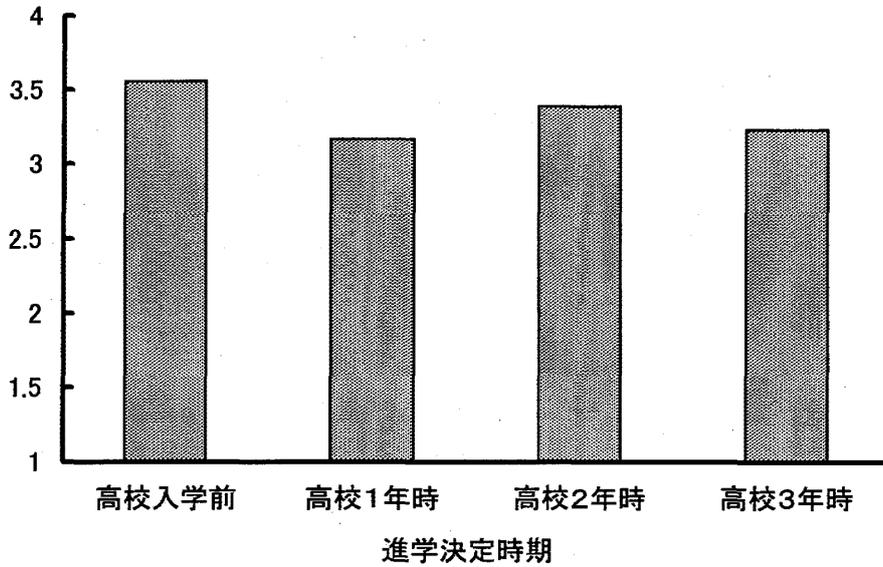


図3 保育士資格取得希望

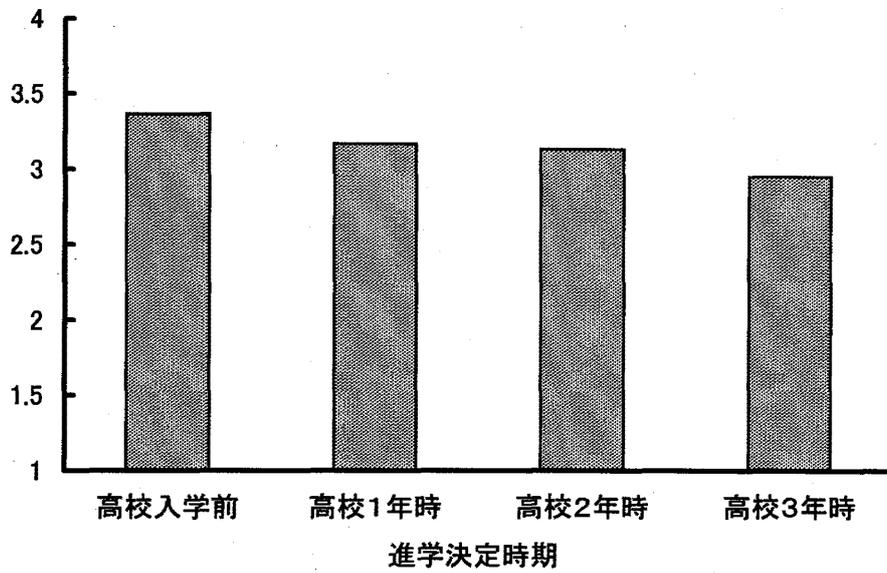


図4 幼稚園の先生としての適性

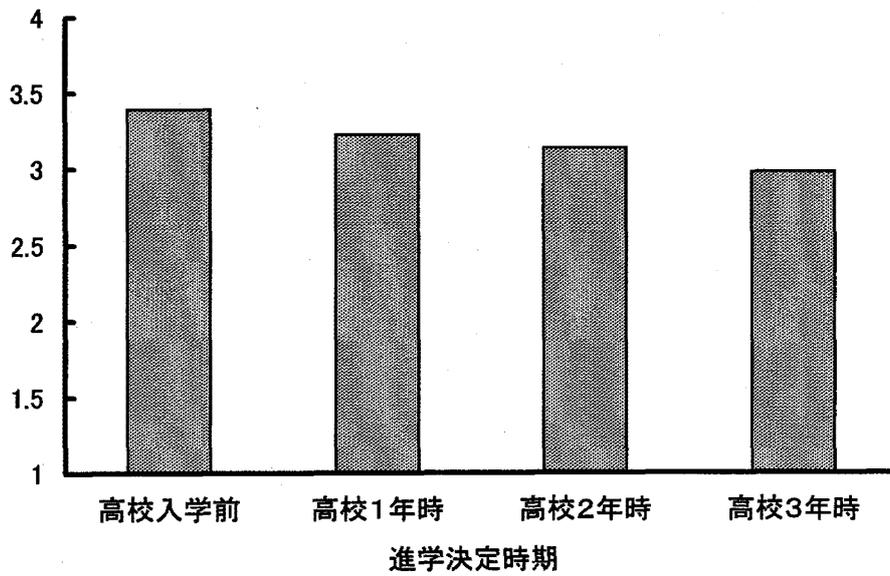


図5 保育所の先生としての適性

8. 幼稚園教諭資質および保育士資質の必要性と自己認識

幼稚園教諭または保育士として働くとき、各種の資質はどの程度必要とされるであろうか。また幼稚園と保育所では求められる資質の違いは有るのだろうか。このような問いに対し、入学直後の学生がどのように考えているかを確認するために、保育者資質に関する25項目について、その必要性をそれぞれ幼稚園教諭の場合と保育士の場合にわけてきた。表8は各項目の平均値と標準偏差を示したものである。平均値からもわかるように、幼稚園教諭、保育士に関係なく、ほとんどの項目について「必要である」(5点)と答えている。「絵・図工が上手である」

や「ダンスなどの身体表現が上手である」などの項目が「やや必要である」(4点)に近いが、入学直後の学生にとっては、どのような資質も重要であり、これから身に付けなければいけない資質であると捉えているようである。

ではそのような資質を、現時点での自分ほどの程度身に付けていると考えているのであろうか。表8の自己認識の平均値を見ると、どの項目においても、必要とされるほどは身に付いていないと考えているようである。とくに技術的な能力に関しては自己評価が低く、十分な自信を持っていない様子が伺える。また精神的な側面についてもまだまだ向上の余地が有ると考えているようである。

表8 幼稚園教諭および保育士の資質の必要性と自己認識の平均値

項 目	幼稚園教諭		保育士		自己認識	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1) 遅刻しない・時間を守る	5.00	0.00	5.00	0.00	4.24	0.91
2) 文章に誤字・脱字がなく、ていねいに書く	4.63	0.61	4.62	0.60	3.45	0.91
3) 整理・整頓、そうじを積極的にする	4.88	0.35	4.96	0.20	3.49	1.10
4) 子どもが好きである	4.92	0.28	4.95	0.22	4.82	0.57
5) 子どもへの優しさ・愛情がある	4.94	0.23	4.99	0.08	4.58	0.71
6) 子どもに積極的に関わる	4.96	0.18	4.96	0.20	3.97	1.01
7) 日誌の書き方・内容が適切である	4.58	0.57	4.60	0.57	2.79	0.76
8) 子どもへに対して共感的に理解できる	4.85	0.39	4.82	0.42	3.73	0.83
9) 保育で観察すべきことがわかっている	4.82	0.40	4.89	0.34	2.37	0.84
10) まじめである	4.35	0.74	4.55	0.66	3.85	0.84
11) 活発で明るい	4.62	0.63	4.72	0.55	4.06	0.82
12) 表情が豊かである	4.76	0.48	4.87	0.36	4.10	0.79
13) 指導案を上手に書ける	4.46	0.65	4.51	0.59	2.39	0.85
14) 時間配分ができる	4.65	0.55	4.67	0.53	3.00	0.98
15) 遊びや活動への導入が上手にできる	4.85	0.36	4.80	0.42	2.82	0.85
16) 適切な言葉かけができる	4.89	0.34	4.89	0.33	3.00	0.88
17) 絵・図工が上手である	3.90	0.79	4.01	0.82	2.92	1.16
18) 手遊びが上手である	4.28	0.68	4.35	0.68	2.80	0.92
19) ダンスなどの身体表現が上手である	4.13	0.72	4.15	0.72	2.85	1.04
20) 集団遊び・ゲーム遊びの指導が上手である	4.54	0.61	4.51	0.63	2.78	0.94
21) 絵本・紙芝居などを上手に読む	4.39	0.71	4.47	0.70	3.25	1.01
22) 積極的に物事に取り組む	4.91	0.29	4.91	0.31	3.94	0.94
23) 協調性がある	4.82	0.45	4.85	0.41	4.11	0.86
24) 責任感がある	4.96	0.18	4.96	0.19	4.16	0.83
25) 向上心がある	4.86	0.41	4.91	0.31	4.26	0.72

9. 資質に関する自己認識についての探索的因子分析

保育者資質に関する自己認識の認知構造を明らかにするために、25項目の評定値にもとづいて探索的因子分析を行った。主成分法によって

因子を抽出した後、プロマックス回転を行った。因子数については、因子数1の場合から因子数10の場合までを順次検討した。固有値の大きさの変化および各因子に含まれる項目を検討した結果、因子数を5個に決定した(表9参照)。

表9 資質に対する自己認識の因子分析の結果

項 目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
9) 保育で観察すべきことがわかっている	0.78		-0.26		0.20
13) 指導案を上手に書ける	0.76	0.13			-0.17
15) 遊びや活動への導入が上手にできる	0.68	0.21	0.22	-0.17	
2) 文章に誤字・脱字がなく、ていねいに書く	0.64	-0.27	-0.11	0.32	-0.13
16) 適切な言葉かけができる	0.54	0.14	0.20		
7) 日誌の書き方・内容が適切である	0.54		-0.13	0.30	
8) 子どもに対して共感的に理解できる	0.53	-0.19	0.22		0.27
20) 集団遊び・ゲーム遊びの指導が上手である	0.49	0.42	0.15	-0.20	
14) 時間配分ができる	0.35	0.19		0.26	
17) 絵・図工が上手である	-0.13	0.84	-0.12	0.11	-0.17
21) 絵本・紙芝居などを上手に読む		0.76			0.16
18) 手遊びが上手である	0.21	0.73	-0.12		
19) ダンスなどの身体表現が上手である	0.13	0.66			
11) 活発で明るい	-0.17		0.95	-0.18	
12) 表情が豊かである		-0.18	0.91		-0.22
23) 協調性がある			0.52	0.29	
22) 積極的に物事に取り組む		0.12	0.49	0.26	0.17
24) 責任感がある			0.20	0.76	
10) まじめである			0.10	0.71	
3) 整理・整とん、そうじを積極的にする	0.15	0.17	-0.26	0.63	
1) 遅刻しない・時間を守る	0.24	-0.23	-0.16	0.56	-0.21
25) 向上心がある	-0.20	0.25	0.35	0.52	
4) 子どもが好きである			-0.23	-0.13	0.94
5) 子どもへの優しさ・愛情がある			-0.14		0.93
6) 子どもに積極的に関わる	0.18	-0.15	0.41		0.56
固有値	7.27	2.48	2.00	1.85	1.20
寄与率(%)	29.09	9.92	8.00	7.34	4.80

第1因子は固有値7.27、プロマックス回転後は、項目番号9, 13, 15, 2, 16, 7, 8に高い因子付加量を得ている。この因子には、保育で観察すべきことがわかっている、指導案を上手に書ける、遊びや活動への導入が上手にできる、文章に誤字・脱字がなく、ていねいに書

く、適切な言葉かけができる、日誌の書き方・内容が適切である、子どもに対して共感的に理解できるなどの項目が含まれている。これらの項目は、保育活動全体を見渡した上で具体的な指導計画を立てるために必要な資質が含まれている。したがってこの因子は「指導計画」の因

子であると考えられる。

第2因子は固有値2.48, プロマックス回転後は、項目番号17, 21, 18, 19に高い因子付加量を得ている。この因子には、絵・図工が上手である、絵本・紙芝居などを上手に読む、手遊びが上手である、ダンスなどの身体表現が上手であるなどの項目が含まれている。これらの項目は、保育場面で必要とされるさまざまな実技的な技能を示している。したがってこの因子は「実技」の因子であると考えられる。

第3因子は固有値2.00, プロマックス回転後は、項目番号11, 12, 23に高い因子付加量を得ている。この因子には、活発で明るい、表情が豊かである、協調性があるなどの項目が含まれている。これらの項目は感情表現が豊かであり積極的に行動する明るい性格を表している。したがってこの因子は「明るさ」の因子であると考えられる。

第4因子は固有値1.85, プロマックス回転後は、項目番号24, 10, 3, 1, 25に高い因子付加量を得ている。この因子には、責任感がある、まじめである、整理・整頓、そうじを積極的にする、遅刻しない・時間を守る、向上心があるなどの項目が含まれている。これらの項目は物事にきちんと取り組むという姿勢を表しており、まじめな態度を表しているといえよう。したがってこの因子は「まじめさ」の因子であるといえよう。

第5因子は固有値1.20, プロマックス回転後は、項目番号4, 5, 6に高い因子付加量を得ている。この因子には、子どもが好きである、子どもへの優しさ・愛情がある、子どもに積極的に関わるなどの項目が含まれている。これらの項目は子どもに対して愛情を持ち、やさしく積極的にかかわろうとする姿勢を表している。したがってこの因子は「愛情」の因子であると考えられる。

以上の結果から、入学直後の学生たちは自己の保育者資質に関して、大きく分けて5つの側面から認識していることが明らかとなったが、それぞれの側面について具体的にどのような評価をしているのであろうか。図6は各因子の評

定値の平均値を示したものである。5因子の得点は各因子に含まれる項目の評定値を合計したものを項目数で割った値を用いた。因子間の平均値の差を検討するために、繰り返しのある1要因分散分析を行った。その結果主効果が有意であった ( $F=227.73$ ,  $df=4/556$ ,  $p=.000$ )。主効果が有意であったので、Bonferroniの方法による多重比較を行った。学生がもっとも自分に「あてはまる」と考えるのは「愛情」の因子であり、「明るさ」と「まじめさ」の因子がそれに続いている。また「指導計画」と「実技」の因子はもっとも評価が低く自信が持てないようである。これらの結果から、入学直後の学生の自己像として、子どもが大好きで子どもに積極的にかかわりたいと思っており、自分自身は明るくてまじめであるが、具体的な指導計画や実技の勉強はこれからであり少々不安に思っている、という姿が浮かんでくるのではないだろうか。

なお今回因子分析の対象とした25項目は、吉村他(2005)が用いた保育者資質を示す42項目の因子分析結果を参考にし、整理したものである。吉村他(2005)の結果と比較すると、「指導計画」、「実技」、「まじめさ」、「愛情」など内容的に共通するものが多いが、一部に違いも見られる。もちろん因子分析の結果は、項目数や対象者、用いる手法などによって変化する可能性があり、探索的因子分析だけでは因子構造の相違について十分な検証を行うことはできない。また今回の対象者は入学直後の1回生であるが、今後実習などの経験を経て、その認知構造も変化する可能性もある。したがって保育者資質の認知構造について、より深く検討するためにも今後は探索的因子分析と確認的因子分析を併用して分析を行う必要があるだろう。

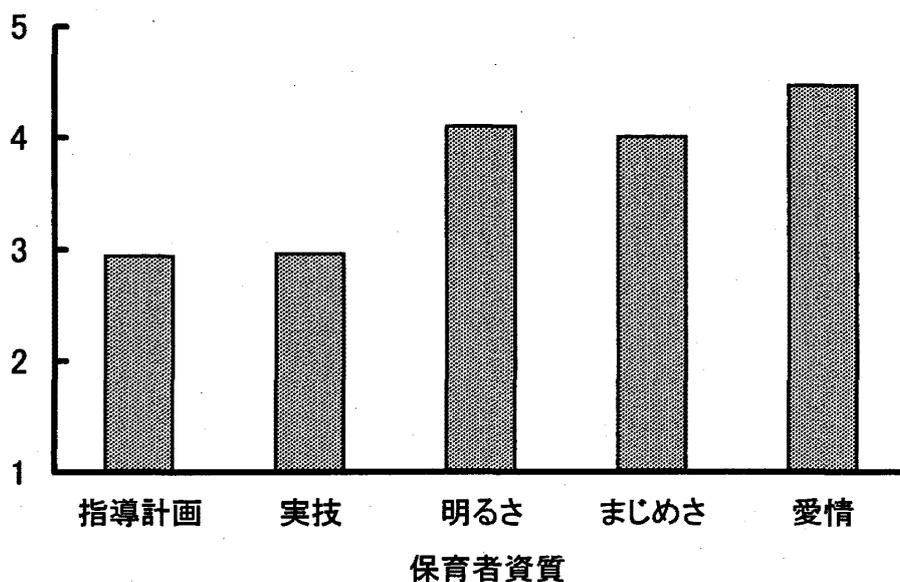


図6 各因子の平均値

#### 10. 保育者志望に関する重回帰分析

保育者資質のどのような側面が、保育者になりたいという気持ちに影響を与えているかを明らかにするために、保育者志望の強さを従属変数とし、保育者資質の5因子を独立変数とする重回帰分析を行った。保育者志望と各因子の平均値と標準偏差を表10に示す。重回帰分析の結果、「保育者志望」に対して「指導計画」( $\beta = -.220$ ,  $p = .030$ )が有意な負の影響を、「愛情」( $\beta = .463$ ,  $p = .000$ )が有意な正の影響を示した(表11)。この結果は、自己の指導計画の資質が至らないと思っている学生ほど、保育者になりたいと思っている気持ち強いこと、および子どもが好きで子どもに関わっていきたいと思っている学生ほど、保育者になりたい気持ち強いことを示している。「保育者志望」に一番大きな影響力を持っていたのは、「愛情」の因子であった。子どもに対して愛情を感じ、やさしくかつ積極的に接していききたいという気持ち強い学生ほど、子どもと接する職業に就き保育者として働きたいと願う気持ち強いことは容易に理解できる。「指導計画」の因子は2番目に大きな影響力があったが、「保育者志望」と

は負の関係にあった。この因子には、保育活動全体を見渡した上で具体的な指導計画を立てるという、比較的高度な能力が含まれている。この因子が「保育者志望」と負の関係にあるのは興味深い。単純に解釈すれば「指導計画」の資質に自信が有る学生ほど保育者になりたいという気持ちが弱いということになるからである。しかし今回の調査対象者が、入学直後の学生であることを考えると、むしろこの結果は、学生の入学直後の期待と不安を表しているのではないかと考えられる。つまり保育者になりたいという強い気持ちと憧れを抱きながらも、本格的な勉強はこれからであり、どこまでやれるか不安である、まだまだ自信がないという気持ちを表しているのではないだろうか。そして保育者になりたいという思いが強い学生ほど、その傾向が強いということではないだろうか。

表10 各項目および各因子の平均値

	平均値	標準偏差
保育者志望	3.41	.85
幼稚園教諭適性	3.17	.66
保育士適性	3.16	.70
指導計画	2.93	.59
実技	2.96	.80
明るさ	4.10	.65
まじめさ	4.00	.60
愛情	4.46	.63

N = 140

### 11. 幼稚園教諭適性および保育士適性に関する重回帰分析

保育者資質の5つの因子は、幼稚園教諭適性や保育士適性の自己認知にどのような影響を与えているであろうか。この問題を明らかにするために、まず幼稚園教諭適性を従属変数とし、保育者資質の5因子を独立変数とする重回帰分析を行った。表10に幼稚園教諭適性と各因子の平均値と標準偏差を示した。重回帰分析の結果、「幼稚園教諭適性」に対して「明るさ」( $\beta = .248, p = .002$ )と「愛情」( $\beta = .341, p = .000$ )が有意な正の影響を示した(表11)。この結果は、子どもが好きで愛情を持ち、積極的にかかわりたいと思っている学生ほど、また自分は明るくて活発であると思っている学生ほど、自分は幼稚園教諭に向いていると考えていることを示している。

次に保育士適性を従属変数とし、保育者資質

の5因子を独立変数とする重回帰分析を行った。表10に保育士適性と各因子の平均値と標準偏差を示した。重回帰分析の結果、「保育士適性」に対して「愛情」( $\beta = .366, p = .000$ )が有意な正の影響を示した(表11)。また「明るさ」( $\beta = .161, p = .067$ )も正の影響の有意傾向を示した(表11)。この結果は、子どもが好きで愛情を持ち、積極的にかかわりたいと思っている学生ほど、自分は保育士に向いていると考えていることを示している。さらに自分は明るくて活発であると思っている学生ほど、保育士に向いていると考える傾向があることも示している。

これらの結果が示すように、入学直後の段階では、子どもに対する愛情が豊かであつ明るく活発な人間であると思っている学生ほど、幼稚園教諭であろうと保育士であろうと関係なく、自分が保育者に向いていると考えているようである。

以上の結果は吉村他(2005)の結果とは一部異なっている。吉村他(2005)の結果では、「実技」や「指導計画」に相当する因子が正の影響力を持っていたが、本研究ではそのような影響力は見られなかった。また吉村他(2005)の結果では、幼稚園教諭適性と保育士適性の場合で違いが見られたが、本研究では大きな違いは見られなかった。これらの違いをもたらした大きな原因の一つに、調査を行った時期が考えられる。吉村他(2005)の研究では調査時期の関係から、幼稚園や保育所での実習を経験した学生が含まれていた。それに対して本研究では、調査対象者は入学直後の学生であり、幼稚園や保

表11 重回帰分析の結果

	保育者志望		幼稚園教諭適性		保育士適性	
	$\beta$	有意確率	$\beta$	有意確率	$\beta$	有意確率
指導計画	-.220	.030	.084	.377	-.013	.897
実技	-.049	.600	.073	.409	-.015	.874
明るさ	.072	.401	.248	.002	.161	.067
まじめさ	-.039	.650	.051	.527	.012	.894
愛情	.463	.000	.341	.000	.366	.000
重相関係数(R)	.466	.000	.560	.000	.433	.000

育所での実習は体験していない。この実習経験の有無という違いが適性判断に影響を与えた可能性がある。したがって本研究の対象となった学生が、今後さまざまな実習経験を経るなかで、適性判断そのものも変容していく可能性は十分ある。この点については、今後継続して調査を行い、その影響について検討を行ってゆくことが重要であろう。

### まとめと今後の課題

本研究の目的は、保育者養成課程を持つ大学に入学した直後の新入生を対象として調査を行い、幼稚園教諭資質と保育士資質についての認識をあきらかにすることであった。また大学に入学する以前の、保育参加体験の有無についても調査を行い、幼稚園教諭や保育士としての資質や、適性判断に関する認識への影響についても検討を行った。主な結果は以下のとおりである。

- ・大学に入学する以前に幼稚園や保育所などで保育の参加体験をした学生は、72.5%にも昇り、中学校の段階でもすでに半数を超えている。

- ・保育に関する大学や短期大学に進学を決めた時期については、中学校の段階で25.4%、高校1年で12.7%、2年で21.8%であり、約60%の学生が高校2年までに進路を決定している。

- ・資格や免許に関しては、幼稚園教諭免許については95%以上、保育士資格については80%以上の学生が取得を希望している。

- ・保育者適性の自己判断では、約3人に2人は「どちらともいえない」と考えており、約4人に1人は「適している」と思っているが、11人に1人は「適していない」と思っている。

- ・保育参加体験と進学決定時期の関係では、参加体験がある群では中学校の段階ですでに保育系大学への進学を決めていた学生の割合が最も多いが、参加体験のない群では高校3年生になって初めて進学を決めた学生の割合が最も多い。

- ・保育参加体験は、保育者になりたいという気

持ちをより強めている。保育士に関しては、参加体験がある群の方が資格取得希望がより強く、適性判断もより高い。しかし幼稚園教諭に関しては、適性判断により高い傾向があるものの、免許取得希望については差がなく、両群ともに強く希望している。

- ・進学決定時期との関連では、早くから保育系の大学への進学を決めていた学生の方が、保育者になりたいという気持ちがより強く、先生としての適性も高いと判断する傾向がある。しかし免許や資格については、進学決定時期に関わらず取得したいという気持ちが強い。

- ・入学直後の学生にとって、幼稚園教諭であろうと保育士であろうと、必要とされる資質に差はなく、どの資質も重要であると考えている。しかし自分自身に関してはまだまだ自信がなく、自己評価の低い項目もみられる。

- ・保育者資質に関する自己認識の認知構造については、因子分析によって、指導計画、実技、明るさ、まじめさ、愛情の5因子が得られた。5因子の比較から、学生がもっとも自信を持っているのは「愛情」であり、「明るさ」と「まじめさ」がそれに続いた。また「指導計画」と「実技」については最も自信がなく、自己評価が低かった。

- ・重回帰分析の結果から、保育者になりたいという気持ちに一番大きな影響を与えている因子は「愛情」であった。また「指導計画」も有意な負の影響を与えていた。子どもに対する「愛情」を強く感じている学生ほど、保育者になりたいという気持ちが強い。しかしその一方で、保育者になりたい気持ちが強い学生ほど「指導計画」に自信がなく、不安に感じている様子が見えてくる。

- ・幼稚園教諭適性や保育士適性に関する重回帰分析の結果、適性判断には「愛情」および「明るさ」の因子が正の影響を与えていた。幼稚園教諭の場合でも、また保育士の場合でも、入学直後の段階では、子どもに対する愛情が豊かかつ明るく活発な人間であると思っている学生ほど、自分が保育者に向いていると考えているようである。

以上の結果から、入学直後の学生は保育者になりたいという強い希望を抱いており、幼稚園教諭免許や保育士資格の取得を目指しているものの、自己の適性についてはまだまだ自信がなく、判断がつかかかっている状況であることが明らかとなった。また入学直後の段階では、幼稚園教諭に必要な資質と保育士に必要な資質について、認識の差はなく同等のものと捉えていることが明らかとなった。

入学前の保育の参加体験については、多くの学生が経験しており、保育者志望の強さや適性判断にさまざまな影響を与えていることが明らかとなった。したがって保育の参加体験がある学生とない学生の間には、大きな意識の違いがある可能性があり、保育者養成課程においてもそれを考慮した対応を考えていく必要がある。今後の課題としては、まず用語の整理を行うことが必要であろう。本研究で用いた資質という言葉は、本来はうまれつきの性質や才能、資性、天性という意味を持つ（広辞苑 第五版）。しかしながら保育者養成に関わる多くの学術論文、雑誌記事等では、保育者の持つ性格や態度だけでなく、知識や技術も含めて資質という言葉を使っていることが多い。本研究においても、資質という言葉に先天的なものだけでなく後天的なものも含めて使用しているが、他にも専門性や能力といった類似した概念が多い。今後議論を深めてゆくには、使用する語句の概念を整理し、共通の基盤を整えることが重要であろう。

つぎに学生の意識の変容過程についても、実証的な検討を継続していく必要があるだろう。本研究の調査対象者は、入学直後の新生であった。新生の段階では、幼稚園教諭と保育士に必要な資質には差がなく、同等のものと捉えていたが、この結果は先行研究の結果と異なるものであった。したがって本研究の対象となった学生の意識も、今後講義を受け実習を経験する中で変容していく可能性がある。保育者資質に対する認識と保育者養成課程での教育との関係を明らかにするためには、幼稚園での教育実習や保育所での保育実習の直後の時期、卒業直前の時期など、教育的に意味のある時期に

調査を重ね、その結果を縦断的に比較する研究が必要であろう。その意味では本研究は第1段階であり、今後継続的な調査を行ってゆきたいと考えている。

最後に保育者養成校の教員自身が、保育者の資質についてどのような認識を抱いているかについても検討を行う必要があるだろう。すでに述べたように幼保一元化の流れの中で、期待される保育者像も昔のままではありえない。時代の要請の中で、変わる部分と変わらない部分が当然出てくる。どのような資質や専門性が今後必要とされていくのかという問題は、保育者養成に関わる教員自身がまず真剣に考えなければならない問題であろう。保育者の資質や専門性に関する問題は、教育目標を定め、カリキュラムを開発していく過程と密接に絡んでいるからである。そのためにもまず教員自身の認識に関する調査を行い、検討のための基礎資料を得ることが重要であろう。

## 引用文献

- 秋田喜代美 (2000). 保育者のライフステージと危機 発達 21 pp. 48-52.
- 鯨岡 峻 (2000). 保育者の専門性とは何か 発達 21 pp. 53-60.
- 松平信久 (2000). 保育者は何を期待されてきたか 発達 21 pp. 2-8.
- 三木知子 (2004). 保育科短大生の進路選択行動について(8)—一般性自己効力感とSD法による自分自身イメージとの関係を中心として— 頌栄短期大学紀要 27 pp. 55-64.
- 文部省 (1993). 個性を生かす進路指導をめざして：生徒ひとりひとりの夢と希望を育むために 中学校進路指導資料；第2分冊 日本進路指導協会
- 森上史朗 (2000). 保育者の専門性・保育者の成長を問う 発達 21 pp. 68-74.
- 森上史朗 (2004). 最近における保育の動向と課題 発達 25 pp. 2-8.
- 社団法人全国保育士養成協議会専門委員会 (2006). 保育士養成システムのパラダイム変換—新たな専門職像の視点から 保育士養成資料集 44 p. 79.
- 山崎 晃・樟本千里・上田七生・中川美和・若林紀乃・芝崎良典・倉盛美穂子・鳥光美緒子・七木田敦 (2004). 幼保一元化・一体化をめぐる諸問題—保育関係者はこの問題をどのよう

にとらえているか—保育学研究 42 pp. 272-285.

吉村啓子・添田久美子・吉村 英 (2005). 保育者養成課程在学生の幼稚園教諭資質と保育士資質に対する認識の違い—保育者適性自己判断をてがかりとして—京都光華女子大学短期大学部研究紀要 43 pp. 67-78.